



# 放射能汚染、 子どもに罪はなし 進士 徹

「ふくしまキッズ夏季林間学校」参加募集開始と同時に申し込みが殺到。一次募集二百人の定員は、わずか六〇分で埋まり驚きでした。その後も申し込みが絶えない状況でした。親も子ども自身も、福島原発爆発事故による放射能の不安が深刻である証でした。放射線値の高い地域では、子どもたちは外で遊ぶこともできず、ストレスから発熱を起こすなど、体にも異変が起きました。

日本人の誰も経験のないこの人災は、いつ抜けるか分からない暗闇状態です。その中に

あつて、希望の灯りをともすことができると思い、今までのつながりや、多くの理解と支えを得て、子どもの笑顔と元気を応援する「福島の子どもの守ろうプログラム実行委員会」が誕生し、四月当初から動いたのです。

我慢をしている子どもたちに、せめて夏休みは放射能の心配のない所で、思いつきり子どもらしさを取り戻してほしいです。期間は一週間から最長で五週間。北海道庁や、現地NPOの連携、そして駒ヶ岳と大沼のある北海道七飯町が夏休み中、快く迎えてくれました。ありがたいことです。

滞在中の子どもの経費は、支援金という寄付を募り、たくさんの温かい心が寄せられました。子どもは日本の未来であり希望です。

将来はこのような活動に日本の社会が応援する仕組みにしたいです。私のこれからの人生は、「ふくしまキッズ」になりそうです。その一歩を踏み出します。

しんじ・とほろ  
一九五六年生まれ。福島県東白川郡在住。大学卒業後一九七九年から社会福祉法人「ふくしまの未来」の生活指導員を務め一九八七年に退職。現在、NPO法人「ふくしまキッズ」の代表理事。福島の子どもの守ろうプログラムの実行委員会委員。  
\*「ふくしまキッズ夏季林間学校プロジェクト」ホームページ <http://fukushima-kids.org/>

# 随想 とほろすいそつ



# いのちの未来に 願いを込めて 馬場利子

私は生来の楽道家です。誰もが心の求めるままに学び、人も自分も幸せになるよう、皆が力を出し合うのが社会だと信じて疑わなかった私でしたが、子どもを身ごもって「いのち」の視点で社会を見てみると、不思議なことの連続でした。なぜ命を殺生する農薬を人には安全だと考えるのか？ 腐らない食べ物はいつたい何なのか？ 問いを発してみると、同じ思いを持つ人は周りにたくさんいました。

食べ物を考え、暮らしを創りながら、幼いわが子を育てていた二十五年前、チェルノブイリ

原発事故が起こりました。「原発」を気にも留めていませんでしたが「食べ物の放射能汚染」という現実直面し、ただ待つていても情報は手に入らない。いのちを人に委ねて生きてはいけない！と気づきました。放射能は見えないけれど、知りたい人と一緒に放射能を測ろうと市民測定室を開設し、多くの汚染情報を共有し、食品メーカーへの働きかけも効果をあげていました。そして、いのちと放射能は共存できないと、脱原発を願って小さな活動も続けてきました。

ここ数年、食べ物の放射能汚染も落ち着き、測定を休んでいた今、大震災による福島原発事故が起こりました。「ああ、もう駄目だ」と心に叫んだ時、息子たちは言いました。「今やらなければ何時、原発は止められるの！ 今だよ」。若い人々のためにも諦めず、未来への願いを込めて丁寧に歩みたいと思います。

ばば・としこ  
一九五三年生まれ。一九八八年「浜浜放射能汚染測定室」開設。一九九二年「命を守るための生活講座」主宰。一九九七年より、環境省・環境カウンセラー。一九九九年「暮らしと環境を繋ぐスペース」プログラムフェイロド。二〇〇二年、環境省環境政策推進事務局。二〇一二年六月「静岡放射能汚染測定室」にて測定開始。